

---

# **魔導戦記リリカルなのはStrikerS <交わりし、魔法と魔導の軌跡>**

月影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStrikers <交わりし、魔法と

魔導の軌跡>

### 【Zコード】

N1929N

### 【作者名】

月影

### 【あらすじ】

悲しき運命に“魔法”的力を持つて立ち向かう者が居た。繰り返される悪夢の連鎖、誰にも頼れぬ孤独の戦い。それでもその者は立ち止まらない、全ては友との約束を果たす為に、そして友の為に……

数多の世界の為、“魔導”的力を持つて戦う者達が居た。己を磨き、果たすべき任務を果たし、人に害なす人を、存在をねじ伏せる。譲れぬ信念を胸に抱き、力を振るう者達が居た

二つが交わる時、新たな物語は幕を開ける

この作品は前に書いた『リリカルなのはStrikerS』誰が為の剣』のリメイク + 大幅な路線変更の作品です。最初はクロス、そして第一部で誰が為の剣のリメイクと言う予定です

## プロローグ side M『友が残した新たな道標』

ぼろぼろに崩れた街、降りしきる雨。まるで大きな災厄が過ぎ去った後かの様にこの場所は静寂に包まれていた。そんな場所に存在する一人の人影があつた。黒のロングヘアをした少女が自分の目の前で横たわるピンクの髪を赤いリボンで結つて短めのツインテールにしている少女を見下ろしていた

「なんで、来たの……？」

黒の少女が問うた。静かに、けれどその言葉の奥に確かに怒りと悲しみを交えながら

「えへへへ、ごめんね……」

「あなたの力なんて要らなかつた！ アイツだつて私一人で……」

それは嘘だつた、ついさつきまで自分が一人で戦っていた相手は自分の攻撃なんて諸共しなかつた。彼女が参戦したからこそ倒せた相手だ。けれど……

「あいつを倒しても、これじゃ、何も意味がないじゃない……」

けれど、その先にある結末を彼女は知っている。そしてそれは彼女にとって喜ばしい物では決してなかつた。むしろそれを避けたいが為に彼女は一人で戦つていたのだ。それこそあらゆる犠牲も辞さない覚悟で……。そして“今回”はほんとに全てを犠牲にした。最初に出会う筈だった先輩も、後にこの町にやって来る筈だった彼女も、少女にとっての一番の親友すらも……。

(これでも、これでもまだダメだと呟つのー。これ以上、何を犠牲にすれば を救えるのよー)

自分たちと言つ存在を生み出す元凶はどうやっても排除できない。だからこそ、この少女が自分たちと言つ存在を知り、そして関わる接点となる全てを排除、見捨ててまで彼女を守ろうとしたのにそれでも“また”救えなかつた

「判つてゐる。でも、ちゃんが一人で戦つて傷つくのをどうしても見ていられなかつたんだ。それに」

少女が何か言つてゐる。けれど、その言葉は自分にとつて意味はない。もうすぐ“やり直す為”的準備が完了する。ならばここを捨てて、次に行くだけだ。永遠に終わり無き迷路、道標は一つしかなければそれでも自分はやめる訳にはいかない、立ち止まれないから。けれど

「この場所には思い出があつたから……」

「思い、出……?」

「うん…… ちやんと過(い)した思い出。でも ちゃんは死んじやつて、私にはもう思い出しかなかつたから……」

「つー?」

その言葉に彼女は声を詰まらせた。その様子にも気がつかず、少女は虚ひな目に涙を溜めて言葉を続けた

「でも、この街が無くなつたら……思い出すらも消えちやう気がしたの。ちゃんの生きた証が、存在が、本当に消えちやう気がして……」

少女の言葉に彼女は既に言葉が出なかつた。

（なんで、なんで氣づかなかつたの！？ こんなやり方じや、ダメだつたのにつ！）

仮に今回で少女が生き残つても、少女は眞の意味で救われない。その心には深い傷を、悲しみを、絶望が残る。そしてヤツはそれにつけ込んで少女に“契約”を迫るだろつ。そしていつか少女はそれに応じる。ヤツのもたらす希望にすがる。それが絶望に続く希望だとしても

（全てを救わなければいけなかつた。でなきや、 は本当の意味で、救われないのにつ！！）

そして次の瞬間、少女は苦しそうなつめき声を擧げる。何度も無く見てきた光景、何度も迎えた瞬間。

「ねえ、一つだけお願いが……あるんだ」

そう言つて、少女は手の平に乗せた何かを差し出した。この後、少女が自分に願う事は知つてゐる。故に彼女はその手にハンドガンを握り、その銃口を“ソレ”に向けた。そして、少女が最後に笑顔になると同時に引き金を引き、“ソレ”を壊した、黒く染まつた、少女の魂を……。言葉は途切れ、その場に静寂が戻る。やがて、彼女は少女の傍にしゃがみ込むと

「「めん、本物アリめんね……今まで、何度もつらこ思いをさせて

……」

すでに物言わぬ屍とかした少女の手を握り、彼女は涙を流す。それは後悔と悲しみの涙。自分の歩みが間違いだつたと悟らされた。そしてその為に自分は何度もこの少女を死なせてしまっていた。やがて、嗚咽が止ると、少女はゆっくりと立ち上がる。涙を拭い、決意に満ちた目で少女を見下ろす

「もう、間違わないから……こんどこそ、あなたを救つてみせる。約束を、果たして見せるから」

少女の最後の言葉、それが彼女の中に新たな道標を示す

「だから、もう少しだけ待つて」

そして、少女は“魔法”を使つ。全ての始まりへと帰る魔法を

## プロローグ sideM -2『幾度目の始まり、変わり始めた大局』

「彼女だけでは荷が重すぎたんだ」

「そんな、あんまりだよ……こんなのがって、ないよ」

自分が住んでいた街。されど、今それは辺りから煙がたち込める廃墟と化している。そんな廃墟で、体から血を流し戦い続ける彼女を、少女はただ見守るしかなかつた

「まどか」

そんな少女、鹿田まどかに白い猫に似た動物が声をかける

「運命を変えたいかい？」

「えつ」

「」の世の何もかも全て、君が覆してしまえばいい。君にはソレを可能にする力があるんだから

遠くでこちらのやり取りに気づいた少女が何か言つてゐる。けれど、まどかには聞こえない。ただ田の前の惨劇を覆せる、その可能性に心奪われていた

「だからまどか」

そして、その生物は口にする

「僕と契約して魔法少女になつてよ」

夢はそこで覚めた

「いいですか？ 今日は先生から大事なお話があります」

何時もの教室、何時ものクラスメート、そして何時もの教師、なんてことの無い朝の授業風景。そんな中彼女達の担任、早乙女和子が険しい表情で生徒達を見渡し

「いいですか女子の皆さん！ 卵焼きの焼き加減にケチをつける様な男とは付きあわない様に！ そして男子の皆さんはそんな大人にならない様につ！！」

教壇に手を叩き付けて半ば叫ぶ様に声を出す先生。かと思つたら、その直後「話は以上です……」と今度は涙目でうな垂れる

「あちやー、今回の相手もダメだつたのか……」

「だね……」

既に初めてじゃないのか、先生の反応から大よその状況を理解した青のミドルヘアーの少女、美樹さやかの言葉にまどかは苦笑いをしながらも相槌を打つ

「あー、後ついでに転校生を紹介します」

そして次の瞬間にはケロッとした和子が一番大事な筈の話題を口にする。いや、そっちが大事だろ！とクラス一同の心がシンクロした所で、教室のドアが開き黒いロングヘアーに物静かな、いやどこか冷めた雰囲気を纏う少女が入つてくる。それはまどかが今朝夢に見た少女と全く同じ姿をしていた

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

(あの人、夢に出てきたー？)

等と、まどかが驚いていたのも一瞬。自己紹介を終えたかと思うとほむらはまどかの事を凝視、けれどすぐに田線を外すと自分の席に座つてしまつた

「ね、ねえ？　あの子、いっしにガン飛ばしてなかつた？」

「えつ、そ、そうかな？」

自分と同じ事を思つていたさやかに、誤魔化す様に答えまどかは一限目の準備を始める。ほむらの事を心の何処かで気にしながら

一限目の休み時間、転校生がクラスメートから質問攻めに会うのは殆どお約束みたいなものだ。けれどほむらにとってはそんな事はどうでもいいし、むしろ煩わしいだけ。そう思つほど程に慣れた風景でしかない

「「あんなさい……ちょっと緊張しちゃったみたいで氣分が悪くて、保健室に行かせてもらえるかしら？」

そう言つて、立ち上がりまどかの傍に向かい、もつ何度もとなる言葉を吐く

「鹿田さん」

「は、はー」

「あなた保険委員よね。案内してもらひるかしり?..」

そして、もう自分ひとりで歩きなれた通路を歩く。自分が前でまだかが後ろ、これも同じ……いや、最初の2回だけは自分が後ろだったと思つ出す

「あ、あの暁美さん……」

「ほむらでこいわ……何?..」

「あ、あのねほむらちゃん。私達つて前に何処かであった、かな?  
……なんちゃって、そんな訳、ないよね」

まどかの言葉に黙り込むほむら。そしてまどかの方は変な事を言つて怪しまれたと思ったのか、うろたえながらもさつきの発言を取り下げる。それから数秒、無言のまま一人は目を合わせていたがやがて、ほむらの方から口を開く

「鹿田まどか」

「は、はい！？」

「あなたは家族や、友達の事。大切だと思つてる？」

突然のほむらの問いかけ。なんでこの状況でそんな質問が出るのか、疑問に思うもはぐらかしたり、誤魔化したり出来ないと思ったから、さっきまでのうろたえてばかりだった雰囲気と違い、しっかりと自分の答えを口にする

「勿論、大切だよ。家族も、友達も、みんな大好きだもん」

「そう、なら忠告しておくわ。この先、何があつても自分を変えようだなんて絶対に思つては駄目。出なければ、あなたの大切なモノ……全て失うわ」

そう言って、保健室に入つていくほむら。彼女の言葉の意味がなんなのか？それが判らず、まどかはジッと彼女の入つていった保健室のドアを見つめているのだった

ここまでには同じ。多少の違いはあっても概ね、今までと何の変わりも無かつた。けれど

「あ、すまぬ……ちゅ……おどか、何それマジでー?」

「ハハ、喜び過ぎやなかつた……」

「さやかさん、笑いすぎですわ」

放課後、自分にこの街を案内する。と言つてまどかとさやか、そして二人の親友である志筑仁美と一緒に、街のオープンカフェでこうしてお茶をしているなんて事は無かつた。今まででは事の元凶を追跡、妨害をしている筈だったのに

「まどかの前に突如、現れたミステリアス転校生。暁美ほむら！しかも夢の中で一度あつていた……ってか！？しかも、転校生の方も一度会った事ある様なそぶりだつたと！一人はアレだ、前世か何かで結ばれた仲だつたんだ……これぞ、宇宙の神秘」

「ほむらでいにわ……」

と言つより、一応、そちらからすれば初見の人間に對してよくもまあ、そこまでズケズケと言えるのだろうか。そんなさやかの神経に逆に関心する

「あ、『めんなさい』お先に失礼しますわ」

「今日も面白い事?」

「ええ、それでは」

そう言つて、立ち上ると軽く会釈し仁美は立ち去つて行き、それをきっかけに自分達もオープンカフェを後にする。その帰り、さやかの用事でCROSSTOOLに立ち寄る事になった。今までに無かつた展開、ここまで大きく大局が変わった事なんて無いからハッキリ言つてこの後の展開が全く読めない。

「えつ？ 何、誰？」

「まどか？」

ほむらが、今まで感じた事の無い先が見えない不安に頭を悩ましていると、突然まどかが辺りを見渡し始め、やがてCROSSTOOLを後にした。さやかとほむらも勿論、まどかを追いかける。そこに浮かぶのは一つの疑問

（おかしい……ここでは私は“アイツ”を殺す為に動いていないのに、なのに何故、まどかを呼ぶの？）

今まで自分が奴を殺そと動き、それを利用し奴はまどかを呼んでいた。そして、自分達の世界にまどかを引き込もうとする、それが今までの展開だった。けれど今回はそれは起りえない筈なのに。ほむらがそう考えながらも走つているとやがて近くの改裝中の工場の中に入る。と、同時に周りの空間が歪み始める。二人にとつては奇妙な、ほむらにとつては見慣れた空間に、それと同時に理解する

（私が動いても動かなくてもまどかを呼ぶ事に変わりは無かつた訳ね……）

自分を危機に晒す事で、まどかを呼ぶ。そのやり口はまどかやら同じだつたらしい。ただ、その危機が自分が、もしくはこの空間に居る“敵”によるものかの違いだけだ。ほむらの中で疑問が氷解すると同時にようやくまどかに追いついた。その胸に傷ついた一匹の生物を抱きしめて

「まどか大丈夫!? って、その犬は何? ってか、犬?」

「判らない、でも見つけた時には怪我をしてて……」

そいつから離れて! と、ほむらは叫ぼうとするが、状況がそれを許さなかつた。突然、自分達の前に毛玉にカイゼル髪を生やした数匹の“何か”が現れる

「な、何これ!?! 冗談でしょー?」

突然の未知との遭遇に、戸惑いと恐怖を表す一人。そんな中、ほむらだけは冷静に思考を働かせる

(自身を危機に晒し、二人を巻き込んで契約を迫る、か。相変わらずやり方が汚いわね、けれど )

残念ながら、そのやり方は成り立たない。何せ、一人だけじゃない。自分が居るのだから

(こいつも助ける事になるのは癪だけれど……)

それでも、奴の思い通りにさせる訳にはいかない。そう判断し“変身”しようとした矢先

「やれやれ、未確認の魔力反応を追つかけてきてみれば居たのは鬼でも蛇でもなく、アンノウンか。これはいよいよロストロギア絡みの線が濃厚だな」

今まででは展開が違っていた。そして今度は、今まで居なかつた少年が姿を現すのだった

## プロローグ side M - 2『幾度目の始まり、変わり始めた大局』（後書き）

まどかサイドのプロローグはこれにて終了。なのはサイドのプロローグを経て本編に入ります

## プロローグ side R『大規模合同調査発令』

「これは、次元世界ミッドチルダ、時空管理局と呼ばれる組織に所属する魔導師と呼ばれる者達が住まう世界。魔道師達は日々任務に挑む。質量兵器の根絶、そしてロストロギアと呼ばれし人智を超える存在を規制する。この世界の、そして数多の時空世界の治安の為に

「全く……あんだけの数、一体何処で作ったんだ?」

『判りません。ですが、少なくとも彼らの技術や財力だけでは作れない事は確かです』

新暦70年の月の光だけが届く夜。ミッドチルダの外れに位置する工場跡地にて一人の少年が居た。年齢は14歳ぐらいだ。黒のワイヤシャツにジーパン、そしてその上に丈が胸の少し下辺りまでしか無い、フード付きの白ジャケットに腰から足元にかけては後ろから横を覆う様にジャケットと同じ色と材質のスカートの様な飾り布が巻かれそれをベルトで止めベルトにはポーチが付いた服装をしていれる左手には黒いフィンガーレスのグローブを着け、それに隠れて見えないが手の甲の部分にはミッド式魔方陣の青い紋章が浮かんでいる。髪は黒いロングヘア、それを根元で結つて下ろし、黒い目に眼鏡を掛けた少年だ。その少年が、飛んでくる銃弾の嵐を壁に隠れながらやり過ごしながらそんな事を呴くと、少年が手に持っている一丁の弦の付いていないボウガンの本体部分の青いクリスタルが点滅し、機械音声の様な声が彼の呴きに返答した

「となると、どつかの企業が裏で生産して付近の暴力団や、ヤクザを通じて密売してる、ってどこか?」

『確証はありませんがその可能性が高いと思われます。ですが今は

』

「わーつてるよ、サジタリウス。そうした調査は他に任せて今は連中を何とかするのが先、だろ?」

やがて、そこで銃弾が止むと同時に「よしつー」と気合を入れなおして壁から飛び出したのだった

「昨晩の任務は『苦労だつたな』

それから一夜あけ、少年は自分の所属する部隊である108部隊の隊長、ゲンヤ・ナカジマからの呼び出しで部屋を訪ねていた。彼からの労いの言葉に敬礼しながら「ありがとうございます」と返すとゲンヤは机の前に報告書を置く

「取調べは今も継続中だが、今時点では兵器を量産しているのは連中じやないらしい。定期的にグループのリーダーが何処からか大量を持ってくるらしくてな、何処から仕入れてんのかは、連中にも判らんそうだ。そしてリーダーの所在も不明、目下捜索中つて所だ。こりや、この報告書の通りどつかの企業が一枚噛んでそういう雰囲気だな」

「やはり、ですか」

と、そこでゲンヤは報告書を仕舞うと

「と、まあこの話はこれぐらいにしてお前さんの今後のスケジュー  
ルだが」

スケジュール？任務じゃなくてか？ゲンヤの少し変わった言い方  
に少年が首を少し傾げると

「明日から2日ほど休暇を取つて体を休めろ。その間デバイスの方  
もオーバーホールに出しどけ」

「休暇？ この時期に、ですか？」

てっきり自分もこの事件の裏にいる企業の捜査に加わるものだと  
ばかり考えていた彼は思わず尋ね返すと、ゲンヤはさつきの報告書  
とは別の資料を取り出し、彼に見せる

「第43管理外世界、ここはお前たちの故郷である第97管理  
外世界と非常に酷似している。地球も存在するし日本も勿論存在す  
る。まあ、詳しい地名とかは変わってはいるがな。他に違うところ  
と言えばこの世界の住人はほぼ全員がリンクアーコアを有している。  
が、それにも関わらず魔法技術は一切発達していない。管理局の上層  
部でもこの世界を管理世界にし、魔法技術を伝えるか否かで未だ議  
論をしている」

まあ、確かにこの世界の住人に魔法の技術を伝えればそれだけで  
管理局の魔導師の人員を増強する事もできる。が、異世界の技術を  
伝えその世界の歴史に干渉する事も余り、良いものではない

「で、ここからが本題だがついこの間この世界の地球で未確認の魔力反応を感じた。いや、それどころじゃねえ」

そこでゲンヤは一旦、言葉を切る。そしてため息を吐くとゆっくりと口を開き

「地球全体を、巨大な魔力反応が覆い尽くしてて、つてのが正しい状況だ」

「なつ！？」

魔力反応を見つけた。と言つながらまだ判る。大方、誰かが不正にデバイスや魔法の技術を伝えようとしているだけなのだから。

「魔法技術が全く発達していない世界で、星を丸ごと覆い隠す程の魔力反応……はつきり言つて異常以外のなにものでもない、十中八九ロストロギアが絡んでいると見て間違いないだろう。一体、地球で何が起きているのか皆目検討もつかん。そこで上層部はある決定を下した」

ゲンヤは更に数枚の資料を彼に渡し。複雑な表情でこいつ告げる

「陸と海、それぞれから優秀な魔導師を選出し、合同での大規模捜査を行つらじい」

「陸と海の、大規合同模調査……ですか」

その言葉に彼の表情も曇る。それもその筈、時空管理局と言う組織は決して一枚岩ではない。地上本部と本局、すなわち陸と海の間

に大きな確執がある。むしろあのレジアス・ゲイズ中将がそれを認めた事が驚きだ。つまり、今回の件はそれだけ大事、と言つ事なのだろう

「ですが、なぜその話をね……自分に？」

「無論、休暇が終了すると同時に前さんにもこの調査に参加してもらいたいからに決まってるだろ？」

「自分が、ですか？　ですがナカジマ三佐、お言葉ですが自分はそんなに」

「謙遜も程ほどこしないと嫌味にとられるぞ。確かにあの二人は去年や一昨年の段階でUランクを取得するほどの奴らだがお前さんだつてその年でAAA・ランク、この任務に参加するだけの資質は十分にある。むしろ、いつかテカイ任務を経験したっていい頃だ」

ゲンヤの言葉に少年は黙り込み、しばらく考える

「判りました。その任務拝命します」

彼がそつとゲンヤは満足そうに頷くと、急に態度を柔らかし

「まあ、そんなに固くならんでもいい。お前さんの所属する第17班はお前さんにとっては氣心の知れた連中が集まってるからな」

そう言つて、ゲンヤは宙にディスプレイを出現させて17班のメンバー一覧を映し出す。そこに映つっていたのは高町なのはを始めとした自分の親友達の姿

「さて、それじゃ任務の概要を説明する。今回の任務は現地に降り立ち、地球を覆う魔力反応の調査が主な目的だ。そして原因を究明し、それを排除。魔力反応の消失を持つて任務を完了とする

「了解しました。陸戦魔導師、くるわきゅうとうし 枝木拓斗くるわきゅうたくと一等陸尉。先達の足手まいにならぬ様尽力を尽くし任務に当たります」

## プロローグ side R - 2『調査開始』

時空航行艦アースラ。自分達にとつて馴染みの深いこの船が今回の任務で拠点となっているのも、何かの縁、では無くてアースラの艦長である彼の計らいなのだろう。自分達が担当する区域に向かう中、拓斗はこの船の艦長から現状説明を受けていた

「調査開始と同時に、まず各艦でスキャンを行つた結果、件の魔力反応とはまた別の、不特定の魔力反応が幾つかの場所で検知された。とりあえずはこの魔力反応がなんなのか、そこから調査に入つてもいいと言つのが当面の方針だ。ここまで何か質問は？」

クロノ・ハラオウン提督、拓斗の親友の一人であるフェイド・T・ハラオウンの義兄であり、母、リンディの後を継ぎ、アースラの艦長となり更にはエイミィと言つ婚約者まで居ると言つ、公私共にリア充全開な人生を送つていて。ちなみに今、アースラにはクロノや船のスタッフの他は拓斗一人しか居ない。なのはを始めとした他のメンバーは各自の仕事の処理や引継ぎが終わり次第、順次合流となつていて。

「不特定の魔力反応の正体とコントクトを取つた後の行動は、こちらの判断でいいのでしょうか？」

「一応は、な。それと拓斗からなのはに伝言を一つ預かつていて。  
「自分達が合流するまで無茶はしないでね」だそうだ」

「……可能な限り善処する。つて伝えておいてください」

「フツ、判つた。伝えておいでください」

「艦長、調査区域に到着しました」

「了解した。さて、ここが今回、僕達が調査する区域、見滝原市だ。魔力反応の出現頻度が他の区域より比べ多い。警戒は十分しておいてくれ」

「了解、つと」

「どうだ、サジタリウス?」

『不特定魔力反応無し、現地人のリンカーコアの反応のみです』

それから数分、拓斗は見滝原市に降り立ち調査を開始していた。今の拓斗の格好は管理局の制服ではなく、ジーパンに白のパークーと一般的な格好、何時もの黒いグローブは変わらず、首には青い宝石の付いた金属製のネックレス、待機状態のサジタリウスが掛けられていた

「流石に、そう簡単にはいかないか。しつかし……」

そこで言葉を切り、辺りを見渡し始め

「本当に、みんなリンカーコアを所有しているんだな。だと言つて魔法の存在は絵空事。そりや上層部も揉めるわな」

魔法や異世界は実在する、そんな事が知られれば世界的大事件に繋がる。上層部が判断に苦しむのも理解できた。と、自分の世界の日本円が使えたので途中の自販機でジュースを買いながらとりあえずプラプラ歩いていると近くのクロシヨップから一人の少女が走りながら飛び出してきて、その後に続き更に一人の少女も同じ様に飛び出してきた。特に変わった光景でも無いのでそのまま通り過ぎようとした時

『マスター』

「どうした？」

『魔力反応を検知、現在移動中』

デバイスからの報告を聞くと同時に拓斗は飲み終わった缶を近くのゴミ箱に投げ入れ

「トレイスできるか？」

『現在トレイス中。サーチャーを飛ばしてみますか？』

「いや、このまま直接追跡だ。案内頼む」

『了解しました』

「時に、魔力反応の正体の方は不明なまま、か？」

『いえ、先ほど店から出てきた一人の少女、その片方から魔力反応を検知』

「あの二人、か。オイオイ、まさか今回の相手は人間様、なんてオチはカンベン願いたいんだがな」

追跡の途中、拓斗がふと思つた疑問を口にし、サジタリウスから返ってきた答えを聞き軽くげんなりしていた。魔力反応の正体が人、そしてこここの住民は皆リンクカー・コア持ち。そうなると誰が関係者であつても可笑しくない。更に

『マスター、げんなりしてゐる所スマセンが更に悪い報告です。魔力反応突然ロストしました』

「報告ありがとさん……」いつは、予想以上に難航しそうだな……

とりあえず、魔力反応が最後にロストした地点に来てみればそこは改装中の工場。とりあえず、工場に入らうと手を伸ばそうとしたがその手を途中で止めた

「サジタリウス……」

『はい、当区域に結界を確認、魔力反応から認識阻害と空間歪曲の併発型と推測されます』

「術式は？」

『ミッド式、近代及び古代ベルガ式、いずれも該当せず。未知の術式です』

「と、なると解除は不可能……か。ならば力押し、だな」

そう言って、一旦入り口の前から離れると首にかけたサジタリウスに手を掛け、ふと思い出した様に周りの人気を確認すべく周囲を見渡す。やがて誰も居ないのを確認すると

「第一拘束機関解放！ セットアップ！」

グローブの手の甲の部分に一瞬だけ青い紋章が浮かんだかと思うと次の瞬間には拓斗の服装が私服からバリアジャケットに変わり、手には発動状態のサジタリウスが握られていた

「サジタリウス、フォームチェンジ」

『bow form』

それと同時にボウガンだったサジタリウスの形状が大弓に変化する。弦に指をかけ引くと同時に拓斗の魔力が一本の矢を形成し、矢の先端にミッド式の魔法陣が展開される

『Arbalest fanq』

そして矢が射られ魔方陣を通り抜けると同時に矢がまるで流れ星の様に魔力を帯びて飛び、何も無いはずの空間に刺さり、しばらくバチバチと激しく漏電した様な状態になっていたが、やがて空間が

砕け、中には工場とは似ても似つかない空間が広がっている

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

サジタリウスをボウガンに戻し、不敵な笑みを浮かべつつ呟くと同時に拓斗は空間内に進入する。そして

「やれやれ、未確認の魔力反応を追つかけてきてみれば居たのは鬼でも蛇でもなく、アンノウンか。これはいよいよロストロギア絡みの線が濃厚だな」

しばらく、歩かない内に未確認生命体に何か犬っぽい奴と一緒にいる三人の少女を発見するのだった。魔導師と魔法少女、本来は交わるはずも無い二つの物語が、いま交わり始める

## 第一話『ファーストコンタクト』

「あなた、何者？」

「何者かと聞かれれば今の所は……企業秘密。そもそもって君達と敵対するつもりも今の所は無いって感じだな」

「ふざけてないで質問に答えて…」

ほむらが突然現れた少年、拓斗に対し声を荒げて訊ねるも拓斗は涼しい顔でそれを流す。その態度に怒りを露にしだしたほむらを拓斗は手で制すると

「まあまあ、そつ怒りなさんな。とりあえずまずはあひらさんをどうにかしようぜ。それともあのアンノウン、お友達なのかい？」

「あんな気色の悪いお友達は『ゴメン』よ」

「だよな、俺も『ゴメン』だ　っと」

突然、アンノウンが拓斗に対し突進を仕掛けてきたのを拓斗はバックステップで回避すると同時にサジタリウスの矢を射る。放たれた魔力の矢はアンノウンを貫通、そのまま相手は弾け飛び消滅した

「加えてあちらも殺る気マンマンってところだし、お話はあれを殲滅してからって事で。オーケー？」

いつも通りの軽いノリでほむらにウインクをして問いかけるとほむらはそれに対し溜息を吐いて、宝石の様な何かを手に持ち

「後で全部聞かせてもらひつわよ」

そして宝石が輝き、それが收まるとほむらの服装は一変。セーラー服にも似ているが何処か違った服装をしており、腕には小型の盾、バックラーが装備されている

「……そつちもな」

一瞬、デバイスなのかと思い、サジタリウスに目を向けるが自分のデバイスからは答えは返つてこない。つまり、デバイス反応では無い未知の反応にサジタリウスも困惑氣味つて所だろう。ほむらが自分の盾からハンドガンを取り出し、アンノウンに向けて引き金を引くと同時に拓斗はそう咳いて戦闘を再開した。そして、その後ろで状況が何一つ掴めず混乱している二人がいた

「何!? 何なのよアイツ!! てか転校生、その格好、と言つかコスプレ、それにその銃もしかして本物じゃー?」

「お、落ち着いて! サヤカちゃん」

その時だった。困惑している一人の背後からそつちの同じアンノウンが数匹、近づいてきたのは

「ちよ、ちよっと冗談でしょー? い、こいつ来るなあ……」

「つー? しまった!」

そしてその事にほむらの方が先に気づき、自身の能力を発動させるべく盾に手を掲げる。が、次の瞬間、何処からか伸びてきた黄色

いリボンがアンノウンを絡めとり、続けて銃声と共にまどか達の傍にいたアンノウンが弾け飛ぶ

(これは……?)

「あなた達、危ない所だったわね。でも……もう大丈夫よ!」

そこに居たのはほむらが予想した通りの人物。自分と似た服装。けれど、こちらは黄色の茶色、白を基調としており、頭には羽毛の飾りと中心に黄色の宝石をあしらつた花を模した飾りがついた帽子を被り、その手にマスケット銃を持つた少女の姿が

「……どちら様?」

「自己紹介は後で。とりあえずまずは」

突然の登場にまじか、ワンテンポ遅れて訊ねるとその少女は一人の傍に立ち、拓斗とほむらが交戦している方の集団に目を向ける

「使い魔共を片付けないとね!」

そう言つて、自分の手を横に払つた瞬間、彼女の周りに大量のマスケット銃が姿を現して

「そこの人。今すぐそこから離れて!」

そして拓斗とほむらに指示を飛ばた。ほむらはすぐさま、それから少し遅れて拓斗もそこから飛び退くと同時に、全てのマスケット銃の引き金が引かれ、放たれた銃弾の嵐は瞬く間に全てのアンノウンを駆逐していき、静寂が戻る頃にはアンノウンの姿は消え

ていた。そしてそれから数秒程すると同時に空間が不安定に波打つたかと思うと次第に「元の、工場内部の空間に戻っていた

「これでよしー。」

「ありがとう。マミ、おかげで助かったよ

「しゃ、喋った！？」

少女の手から暖かな光が溢れ、それを自分の膝の上に乗せていた謎の生物に翳すと傷はみるみる癒えていき、完全に傷が塞がるとその動物は軽く首を振った後に少女、マミに礼を述べ、動物が喋った事にさやかが驚きの声を出す

「お礼ならこの子達に言つて。私じゃ間に合わなかつたかも知れないから」

「うん、ありがとうー。まどかー。さやかー！」

「何で私たちの名前知つてるのー？」

「私からもお礼を言わせて、この子は私の友達なの。助けてくれてありがとう」「

「え、ええ……別に、気にしなくていいわ

「成り行き上、やうなつただけだしな」

笑顔でお礼を言つマリは対し拓斗は肩を軽く竦めながら、まむりは何処か歯切れが悪そうにそれぞれ言葉を返す

「それにして……」「

マリは突然、拓斗の方をじぎじぎと見つめ拓斗は何事かと首を傾げていると

「あなた……もしかして男装女子?」

次のマリの一言で思わず「はあ…?」と顔を荒げる

「おこおこ、何処をぞひ見たら俺が女に見えるんだよ?」

「や、やつよね、「めんなさい。でもキュウベイが男と契約した。なんて話、聞いた事無いから」

「そりゃあね。僕と契約出来るのは女の子だけだし、僕も男と契約した記憶は無ことよ」

「だったら、わしあの魔法は?」

と、胸に抱いていたキュウベイと呼ばれる生物に語になると拓斗は窓の外に目を向ける

「やの話よ。とつあえず落ち着いた場所でしないか?」

拓斗の言つとおり、外はすっかり日が暮れており窓から差し込む月の光が互いの姿を映し出している。そしてマリの方も「それもそ  
うね」と納得し立ち上がる

「なら、血口紹介だけでもしておこうかしら」

「うひ、マリの服装がまだか達の着ている制服と同じ服装で  
変わり

「私は田マリ、あなた達と同じ見瀧原中学の3年生よ。そしてこの子が

キュウベイと呼ばれる生物がマリの手から離れ、地面に着地し

「僕はキュウベイ。まどか、さやか、君達にお願いがあるんだ」

そして、自分が幾度となく色々な少女に向けて言つた一言を言ひ

「僕と契約して魔法少女になつてよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1929z/>

---

魔導戦記リリカルなのはStrikerS <交わりし、魔法と魔導の軌跡>

2011年12月29日22時47分発行